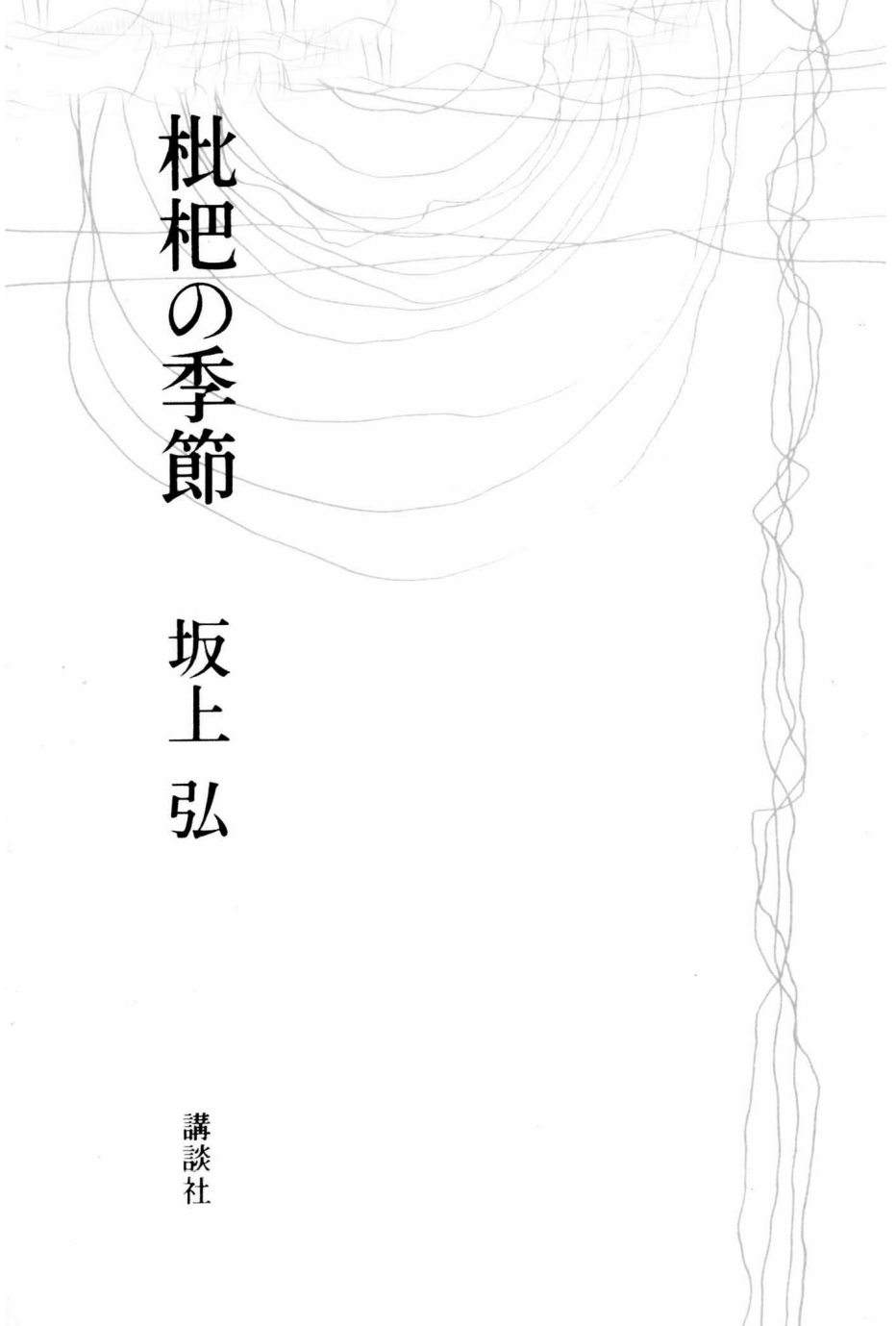




枇杷の季節

坂上弘

講談社

枇杷の季節

昭和四十九年七月二十日 第一刷発行

著者

坂上弘

発行者

野間省一

発行所

株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二二

郵便番号

一一二〇

振替

東京三九三〇

電話

東京(〇三)

九四五一一

印刷所

日大印刷株式会社

製本所

黒柳製本株式会社

Printed in Japan.

©坂上弘 昭和四十九年

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

定価はカバーに表示してあります。

(文1)



目次

枇杷の季節

5

冬の日

85

幼年暦日

129

川のある町

155

白い道

175

装帧·枥折久美子

作品集

枇杷の季節

枇杷の季節

異郷人——私がこんな言葉をかんがえついたのはまだ中学生の頃だった。私の父は銀行員だったので転勤の回数が多かった。ただいつも東京に舞い戻りまたそこから地方に出て行くので、私は少年時代の大半を東京で育ってきた勘定になっても、東京育ちとはいえなかった。そして出たり入ったりしているうちに、慢性的に、一体自分の住みつく所はどこなのだろうと思ったりして、自分は異郷人なのだと考えるようになった。

どの土地にも別れてきたばかりのときは断ちがたい愛着がのこっている。しかしそこは故郷でもないし永く住んだ町でもない。どこも仮りの土地としか言えなかった。そう思うと諦めのようなものが湧いて宙に浮いた自分の愛着自体を閉じこめてしまう。

家族のなかでも父の生活意識はどんなものだったろうか。サラリーマンの常として転勤ごとに栄転という形がとられはしたものの、不平不満も、焦燥もあり、落着きのない

ものだったかも知れない。

書斎の父の机の上にはいつも小さな名簿が一冊転っていた。この名簿から人の名が消えるのは他へ転出するか死んだときだ。それ以外はいつも、あいつはいま何処にいる、どこの部長になった、偉くなった、足踏みしている、と眺めていなければならない。それを考えるとやっかいな名簿だ。淡い青っぽい表紙がついていてポケットに入るくらいの大きさなので、子供の私にはそれが珍しい手帖かなんぞのようで、ノート類の不足していた時代に余白を使うつもりで得意になって学校に持って行き、ひどく叱られた。行員名簿はもちろん部外秘なのだ。私はその名簿を眺めている父を想像すると、仔細らさと同時に、懐しむ顔があるような気がする。どうやら父は、この一冊の名簿の中で一生の旅をするつもりらしい。いや本当に白い脚絆の巡礼よろしく、停年後に名簿を片手にあちこち廻ることぐらい、想像しなかっただろうか。もし時代が別の変りようをして、又生活というものが別のありようであったなら、それは実行できただろう。だがそれは一人の男の一生でどんな意味をもつのだろう。実際には、父は、転勤して廻った所へ行ってみたりなど一度も口にしたことがない。転勤という旅をしつつ父は自分の郷里でもないところにつながれた老朽船なのではないだろうか。

「もう海なんてすぐそこさ。フンドシ一つで走って行ける」

と父は、何度目かの転勤でこれから行く南国の町について語ったことがある。

私は父の口調に照れくささもまじっていると思った。

その転勤は父にはどこか嬉しいかんじのするものだったろう。父は四十を越して脂のりきった時期でもあった。家から禪のまま走って行けるという譬えが、息子には、どこかで本当と思えなくても、ただの上っ調子の誇張とはかんじられない。まぶしい、自信のようなものが伝わってきて、返事をし兼ねる思いで、

「はだかで？」

とびっくりした声を上げた。

「おお、かまわんさ」

父は自分の冗談が通じたように笑った。息子はなんだかちよびりかなくなってきた。父はもともと冗談がうまく言えない性質だった。いや家では周りがそう決めていたのだ。私は、唐人の寝言とか、裏門から屁右衛門殿が、とかのふざけた言葉を父の口からきいたことはある。それはひびきがおかしいだけで父のユーモアでもなんでもなかった。ただそういう言葉に父の恬淡さへの努力が見出せた。母の方は関東育ちで父は関西育ちだが育ちがちがうとユーモアも食いちがうらしい。実際相手にされない諧謔ぐらいアホらしくみじめなものはない。私はなにも家族の笑いというのはお互の人格を尊重するところからうまれる、とは思っていない。むしろ逆かもしれないし、たいいていの場合、人格尊重にかかわりなく笑いは笑いとして、笑って過せるものだ。それがうまく行かないのは単に通じないからなのだ。私は、父にも、妻や子供を笑わせたいと思うこと

はあっただろうし、それなりの冗談や誇張や、落語の落ちのような会話も結構やりとりしていただろう、と考えるだけだ。

ともかく、禪一つで海まで走って行ける、と言うのも、私を喜ばせようとして言ったもので、それを聞いて嬉しかった。家から裸で海辺に駆け出していけるのは、私には願ってもない生活だった。一足先に行ってきた父は、その町の生活に、自信をもっているようだった。

父は転勤のとき最初なるべく子供の前で口にするのを避けている。母とひそひそ相談して、なるべく母から言うようにさせている。子供がたまにかねて、「ねえ、またどこかに行くの」と訊くと、母は仕方なさそうに、「ええ、そうよ、こんどは……よ」と幾らか打ち沈んだ口調で言い、父が「あの荷物を解かなくてよかったじゃあないか」などと元気づけて言うのに殊更恨めしそうに肩で息をつく。ぐずぐずすることの好きな母には一年か二年である転勤はとにかく大変だった。引越しのときなど、一種の気力というものに頼っていなければならず、それはもう母の最も苦手とする精神論なのだ。いけなさとわかっていても母の受け止め方は、本当にいやいやだった。

中学生になった私は子供らしく期待を抱いていた。見知らぬ南国の都会に行く場合、私には異郷人である自覚があった。東京での友だちと離れるのが淋しくもあったが、小学校が終った春休みなので卒業後ばらばらになるのを考えれば同じことだ。臆げながら、新しい町にはそれを吹きとばすくらいの新しい生活が待っているのが感じられる。

父以上に私ははりきっていた。それは私が勝手にきめたことだが、私は一人で何かをやろうとしていた。いままでのすべてを御破算にして自由にやれる生活がきつとその町にはある。思えば私はどんなにこの一人ということを望んでいただろう。学校や家がかかるたびに、こういうニセの独立心というものがしのび込むものだ。

私はおかしな空想をするのが好きだった。私は、父や母とはなれて雄々しく生活する。それをきつと褒めてくれる人がどこかにいる。私は、私を理解してくれ見守ってくれる人と、同じ屋根の下で一緒に仕事をし、一緒に暮らす。その人と笑顔をかわす。その人はばくぜんとしていたが不思議に老人だった。別に会ったこともない支那の仙人みたいでもあり、現実にいる祖父のような人物でもあった。私の保護者というよりは暖かく見守ってくれる人だった。……私の空想は母に話すまでは妨げられなかった。

母は教え諭すように、

「ばかだねえ、お前は。他人は誰一人、面倒なんかみてくれないものよ」

と言ったが、母の口調には何かを払いのけるような荒々しさも含まれていた。

それはそうだろう。誰も好きこのんで他人の面倒は見たがらないものだろう。ところが、敗戦後はそんなことを言っていられない。なにしろ戦災孤児はいっぱいいるし、浮浪者はいっぱいいるし、そういう人たちの面倒は誰かが見なくてはいけないのだ。……ことによれば私は、貧しく感傷的な時代の風潮に染っていたのだ。「鐘の鳴る丘」の物語にでてくるような人々の素朴さにあこがれていたのだ。

だが、こういったたわいない空想は、子供なりの現実的な期待を隠すために発明したものだったかも知れない。私のなかでの身勝手な期待は、仲の良くない兄と離れられることだった。

旧制の高等学校に行っている兄は私など眼中になかったが、いつも家で勝手なことを言い、弟の頭を抑えつけているので、私は嫌いになっていった。兄の出た同じ小学校に通っていたとき、私は、兄を教えた古株の先生から、きみはお兄さんようになってはいかん、と言われた。そのときは大きなお世話だと思った。兄がその先生に対してどんな生徒だったか知らないが、私にしてみれば兄は兄だった。事実、闇市の街や映画やダンスホールを遊び歩いている不良学生にこっちがくっついて行く気になれば、随分面白いことを見せてくれたに違いない。ただ私の年齢ではもう兄にくっついて歩くのが好きではなかった。この兄は、今度の父の転勤にはついて来れずに、東京で寮生活をする事になっていたし、私は一人で新しい町で羽を伸ばすことができるので、ひそかに喜んでいた。

父が赴任した南国の町に、私はこの兄に連れられて出発した。あとから母が家の中の片づけを済ませて下の弟妹を連れて来るということになっていた。

関門海峡の海底トンネルはこわいという印象がつよかった。戦時中最初にこのトンネルを通ったとき、蒸気機関車を電気機関車にとりかえ、車内の電燈がうす暗く点いたり消えたりしたのを憶えていた。車内燈の薄暗くともった息苦しさから、乗客の全部が息

をつめているような顔だった。父が、私たちに時計ではかってみせ、何分何秒、と言った。兄と二人だけであの十分近いトンネルをくぐるのかと思うと私は急に息苦しくなつて厭だと言ひ出した。兄は、よしそれなら連絡船で行こう、と氣まぐれを許してくれた。門司港のがらんとした街につき、黒っぽい石の舗道を駅まで歩いた。人通りの少ない石畳を荷馬車が音をたてて走り去った。果して門司港駅では列車が出たあとだった。お前のせいだ、と兄は私をからかったが、弁当でも食べるか、とわりあい簡単に機嫌を直した。兄にとっては弟を送り届けるなどは自由氣儘な旅行で、小遣を浮かせる工夫の方が大事らしかった。

日豊線というのろい汽車で終着駅に着いたのは早朝だった。朝もやの窓の外には何も見えなかった。駅に降りても破れた屋根があるだけで尚一層何も見えなかった。つまり駅の建物を除けば焼跡のままの市街だったのだ。父のかいた地図をたよりに駅からそれほど遠くない官舎に到着した私たちは勝手な旅をしたことで父からひどく叱られた。しかし出勤前だったのと、一度叱ったらもう放っておくという父の主義で、それほど長くは叱られなかった。

官舎の入口には門がついていた。五軒程が一緒になって灰色の石垣でかこまれており、石垣はよくみると薄紫色をしていてこまかいシダの葉が生えていた。官舎のまわりには、あまり家らしいところはなく、ただ大きな石垣だけはあちこちにあつて、焼ける

前は大きな屋敷でもあったのかもしれない。新しい家に着いて、珍しさから、庭に顔を出す。と、眼の前の空に、大きな山の中腹から半分上が、獣の灰色の腹がのしかかってくるように見えたのには驚いた。二階に上ってみると、山と市街地の間に海があるのが見え、浜辺は大分遠いらしいのがわかった。

「桜島がよく見えますでしょうが」

と女中が笑いながら後に立っていた。割烹着をきている小柄なひとで高い柔かい声だった。私は返事を仕損った。自分の喋るアクセントと全くちがう調子だったからだ。

「田中さんに洗濯物を出しておきなさい」

と父は言って迎えにきた車で出掛けて行った。

女中に見送られて出て行く父は上機嫌だった。官舎の外には明るい日差しの中を走り去った乗用車の音だけが残っていた。

田中さんは座敷のなかを掃きだしながら小造りの顔に慎しみ深い笑いをうかべていた。大変だったでしょう、とこちらが恥しくなるくらい丁寧に労った。それから東京のことをあれこれ聞いた。それは、上野駅と東京駅を一緒くたにしているようなトンチンカンなものだった。

兄は疲れたと言って眠ってしまったので、私は、田中さんに断って近所を廻ってみることにした。全体に白ちやけた色をした石垣や白っぽい道が物珍しかった。

田中さんは薄ら笑いをして、わかるかどうか、と言いながら、長ったらしく、どちら